

おぎぜんだ詩集『アフリカの日本難民』

現実と存在の凝視

佐相 憲一

難民。それは通常、政治経済的な国家機構の弾圧や、戦争・内戦・災害などの被害にあつて他国に逃れている状態の人のことを言う。だから、この詩集タイトル『アフリカの日本難民』にはつとされる方も多いだろう。「逆ではないのか。」

いやいや、これこそがこの詩集の真実なのだ。逆説的な鋭い真実。ここにこそ、これが「詩集」であるという存在意義と深みがあるのである。

日本という国家は、さまざまな問題を歴史的・社会的に抱えながらも、中に住んでいる働く人々の本当の苦しみを見ないで大企業の外向け経済看板だけ見ていると、「豊かな国」と見られることになる。ワーキングプアや過労、ホームレス、自殺、孤独死、過疎などは視野に入らないようだ。

他方で、アフリカというと、大自然の動物などは賛美されるが、そこに生きる人間の方はただただ貧しく政治や暴力に翻弄される「かわいそうな」人々だと見られがちである。

もちろん、一九六〇年のいわゆる「アフリカの年」を中心にしたアフリカ各地における偉大な独立運動や、一九八〇年代から一九九〇年代はじめにかけて世界中の支援運動と共に盛り上がり差別法の廃止にまで至った南アフリカの反アパルトヘイト

黒人運動などをイメージする人もいるだろうし、リズム感あふれるアフリカ音楽や踊りなどを愛好する人もあろうし、人類誕生のはるかな地という面を想像する人もあろう。しかし、一九九四年ルワンダの泥沼の民族間抗争と大虐殺、エチオピアやソマリアの戦争、サヘル地帯の砂漠化や飢饉、飢饉などの情報が強烈過ぎて敬遠してしまいう向きも多いだろう。

どのようなイメージをもっているとしても、日本で暮らす私たちには「アフリカ」は興味深くも、遠い。

そんな広範な読者に向けて、この新詩集をおくる。

この詩集は一章と二章に分かれている。一章が「アフリカ」で、二章が「日本難民」だ。これは、詩のトーンから言えば「太陽と月」の関係、詩の内容から言えば「現実描写と内面凝視」の関係、作者の視点から言えば「たくましいケニア生活とその他の人生苦悩」の関係、存在論的に言えば「外へ向かうところと内に向かうところ」の関係、に当たるだろう。この両章はするように独自の光を放ち、詩集に変化をもたらしていると同時に、相互に深く結びついており、全体としてすぐれて多面的な詩精神が伝わっているとさえ言う。

第一章で詩人おぎぜんだ氏が表現するアフリカの現実には圧倒的である。おそらく読者は、「ここに現実のアフリカがある」と感じると共に「ここに人間存在共通の根本的な生命力と生活力、バイタリティがある」とも感じることだろう。

悲惨な生活環境の中でも人はいかに人であるか。政治経済などに

に翻弄されて矛盾や過ちだらけの中でもいかにたくましく生きうたい、笑い、たたかうか。ここに出てくる人々とその中で生きる作者のこころの叫びが聴こえてくる詩群である。どの作品も生き生きとした血が通っている。

暴露される状況は時に絶望的にも見えるが、その中で生き生きと頑張っている人々の姿は、国を超えて、日本の私たちにも生きる勇氣と連帯心、共感のこころを生じさせてくれる。

語り部としての詩人の才能がいかになく発揮された作品群である。「笑うやもり」「地雷」「泥の道」「キマニの弟」「頭蓋骨から血は流れない」「過去を刈る」「スラム点描」「マサイの血」「バナナの皮」「ママアフリカ」「ジグソーパズル」「黒い大地」「ダンス」と、各タイトルを見た段階ですでに「気合が入った詩集だな」と想像されよう。

その中に、黒人のおそらくは老婆であろう慈悲深い人物が語る設定の長編詩「黒い大地」がある。この詩は詩集全体のこころの象徴のような詩で、詩情豊かな作品である。大変長いのでここでの引用はしないが、第三者としての詩人からの客観記述から始まって、一人称でのこの婦人の語りへとつながっている。その味わい深い語りはアフリカの大地で育ち、愛し、踊り、たたかってきた人の、自らの生い立ちから始まって、太古からの民族の歩み、生活、国の独立とたたかい、といったところまで話がひろがっていくのだ。その言葉の中に、生きることの哲理や大地の鼓動の感覚がちりばめられていて、たくましくも優し

いアフリカの母を感じる作品である。

そして、それらを読みながら読者は、あまりに複雑になって元氣のない現代日本の自分たちのことをもあれこれと考えさせられるのである。

濃厚な現実には圧倒され考えさせられる第一章の後に、第二章冒頭作品「ブルーサファイア」がある。ここで読者は突然、美しい情景の静かな内面を見るのである。そして、きつと癒やしに似た詩情を覚えるであろう。大草原の中の動物の目の青白い光。サファイアのイメージも鮮明だが、作品後半の幻視的飛躍が人の生の哀歡を感じさせて味わい深い。現実の状況の中にどっぷり入った作者がふと一步外側に立ち、大地の遠い昔の物語や、作者自身の存在や人生を見つめるまなざしである。

ここから詩集は、アフリカに住む日本国籍の作者自身の存在の葛藤を浮き彫りにしていく。それを読む日本の私たちは逆に、現代日本に暮らしていることのあるこれ考えさせられるのである。「ブルーサファイア」「ライオンの丘」「日本難民」「非国民」「鎖と奴隷」「僕は黒人にはなれない」「原初としての飛ぶ樹」「耐えるんだよ」「乳房としての愛」「私を切断すると」「凝縮された水」「母の足を洗う」「母は何を」「風の力」といった作品群である。

自分は日本のはみ出し者であるというポーズをとりながら、実は日本の風土というものに鋭い風刺がきいている。風刺詩を書こうとしたのではない自己問答が、読む者にはドキリとさせ

るものになっているのだ。日本そのもののあり方に突き刺さってくるのである。

そんな作者は詩集の終わりの方で、母親へのレクイエムを二篇、静かに響かせている。一庶民の本当の「日本」であろう。アフリカを書く詩人がふと見せる素顔の郷愁。じんわりと胸に伝わるものがある。

そして、ラストの詩「風の力」で、「時空を生きる」者として作者は、地球と人生のひろい場所へと帰って行くのであった。

詩人おぎぜんた氏は鹿児島県の志布志出身の人である。

東京に出て早稲田大学に在籍していた頃は学園紛争の時代で授業中止が相次ぐ中で、本人によると「挫折」としての中途を経験しているという。しかし、私は想像する。早稲田の仲間と文学同人誌を出して小説を書いていたという大都会東京のこの頃の経験が、今になって詩人おぎぜんた氏登場の源泉になったのではなからうか。

その後、農業を本格的に学び、岐阜大学連合大学院の農学研究科を修了する。そして、農業技術者として海外の農業開発事業の仕事に関わっていくのである。アフリカ諸国のみならず、インド洋の島国スリランカでも働いた。

私が初めておぎぜんた氏に会ったのは二〇〇六年初夏の京都であった。当時彼はスリランカに住んでいて来日していた。私

は大阪に住んでいた。詩人会議の集まりだったと思う。国際的な関心など何となく気が合うところがあった。それ以来、向こうもこちらも転居がありながら、たまにメールのやりとりをしてきた。彼の第二詩集『飛ぶきつね』には詩誌に私が書評も書いている。

そんなおぎぜんた氏から今年の夏にメールがあった。この数年に書きためた詩があつて詩集にしたいので読んで批評・編集をしてほしい、とのことだった。そしてまるまるひと夏、電子メールの往復が地球をめぐる、個々の詩作品の個々の行をめぐって、ケニアと東京で熱いやりとりが生まれた。

私もおぎぜんた氏もそれ以外のことはほとんど話さず、ひたすらこの詩集刊行に向けて頑張つたのである。送られてきた作品数、何と約九十篇！ 一篇一篇読んだ。そして、これらの中から厳選に厳選を重ね推敲を経た二十七篇がこの第三詩集に収められているというわけだ。この夏の詩的なやりとりは、いい思い出である。

現代世界と現代日本。人間存在を問うおぎぜんた氏のこの強力な新詩集を、私はひろく現代詩の世界におすすめしたい。すでに好評であることがとてもうれしい。

おぎぜんた氏は来年から今度はルワンダでお仕事をされるらしい。アフリカ在住の新たな日本現代詩人、健在である。